

音楽教育のソーシャライゼーションを目指して ——社会と教室との断絶をどう解消するか——

京都女子大学発達教育学部 深見友紀子

「音楽教育のソーシャライゼーション」という表現には違和感があるだろうか。一般的には、教育こそが子供たちをソーシャライズ（社会化）すると考えられている。しかしこのセッションでは敢えて発想を逆転させてみたい。情報技術が飛躍的に発展しつつある今日において社会化されるべきは、むしろ音楽教育（とりわけ音楽教育学）の側ではないのか。社会からますます乖離しガラパゴス化しつつある音楽教育を再び社会と結合させるにはどうすればよいのか、つまりそれらが本セッションの課題である。

2014年3月刊行の『音楽教育実践ジャーナル』（第11巻2号）において「音楽教育と電子テクノロジー」という特集が組まれたことは記憶に新しいが、ここでも多くの学会員から今日の音楽教育が情報技術と幸福な関係を築けているとは（残念ながら）言いがたいということがしばしば指摘されていた。事実、本学会においても現代的な音楽現象——たとえばDJパフォーマンス・ネットレーベル・サウンドクラウド・初音ミク・ニコニコ動画など——が積極的に取り上げられる機会は未だに殆どないままである。

もちろん、それはある程度まで仕方がないことなのだろう。音楽に限らず昨今の文化実践は成立・変容のスピードが極めて速く、追いかけるのも一苦勞である。また繰り広げられている実践の数も膨大であり、しかも互いに関連しつつも決して一枚岩的にまとまっているわけではない。しかしだからといって、それらを無視してよいということにはならないだろう。そこで本セッションでは、今日の先端的文化状況の一側面を簡潔に紹介し、またそれらの文化と音楽教育がどのように付き合っていくことができ

るか（すなわち、音楽教育をどうソーシャライズできるか）を具体的に考えてみたい。

全体の流れとしては、コーディネーターである深見（京都女子大学）の趣旨説明に続き、3名のパネリストがそれぞれ事例報告を行い、併せて音楽教育への提言を行う。その上で、ソーシャライズする際の問題点について、現職の教員である秀徳能尚（横浜市立川井小学校）が指定討論者として指摘する。各パネリストとその発表予定内容は以下のとおりである。

日高良祐（東京芸術大学）は、若者による新たな音楽流通形態である「ネットレーベル」の紹介を行う。ネット上のフリーなツールを駆使することで自主的な音楽流通のプラットフォームを作りだす彼らの文化から、音楽教育にも援用可能な知見について報告する。

中西宣人（東京大学）は、DIY・DIWOの考え方に即した手づくり電子楽器ワークショップなどの事例や、音楽コミュニティの動向を紹介し、音楽教育への応用を提案する。また、特別支援学校教員と自身との協働による電子楽器の開発実践について報告する。

井手口彰典（立教大学）は、00年代以降急激な拡大を続ける「同人音楽」について、イベントの概要やそこでやり取りされている音楽の中身を紹介する。また当該実践を「生涯音楽学習」の文脈に位置づける可能性を検討する。

以上、一般社会と学校との断絶を解消する策を示しつつ、最終的には断絶の根本的な要因を描き出したい。